

## 極域超高層における大気潮汐波の振舞い (III)

### Studies on the behavior of atmospheric tide in the polar upper atmosphere (III)

# 麻生 武彦[1], EISCAT 大気波動解析グループ 麻生武彦

# Takehiko Aso[1], EISCAT Atmospheric Wave Analysis Group Takehiko Aso

[1] 極地研

[1] AERC, NIPR

極域の中間圏・熱圏における大気潮汐波の振舞いは、北極域では EISCAT レーダーを中心に MF レーダー、MST レーダー、流星レーダー、また南極域では主に MF レーダーや流星レーダーなどの電波的手法による観測と、夜光などの光学観測の総合的な解析により少しずつ明らかになりつつある。ここでは、EISCAT レーダーによる初めての長時間観測であった昨年7月の EISCAT-TIDE/AGW キャンペーンと、これらの期間における他のレーダー、とくに SSR、ESRAD などの観測結果との比較検討を中心に、数値モデルや南極 MF レーダーとの共役観測などを含めた解析について、その一端を述べる。

極域の中間圏・熱圏における大気潮汐波の振舞いは、北極域では EISCAT レーダーを中心に MF レーダー、MST レーダー、流星レーダー、また南極域では主に MF レーダーや流星レーダーなどの電波的手法による観測と、夜光などの光学観測の総合的な解析により少しずつ明らかになりつつある。ここでは、EISCAT レーダーによる初めての長時間観測であった昨年7月の EISCAT-TIDE/AGW キャンペーンと、これらの期間における他のレーダー、とくに SSR、ESRAD などの観測結果との比較検討を中心に、数値モデルや南極 MF レーダーとの共役観測などを含めた解析について、その一端を述べる。とくに最初に調べるべき点として、多点観測データの利を生かして、1日周期成分についての evanescent/propagating 特性、半日周期成分についての migrating/non-migrating 潮汐の寄与ないし東西波数、8時間成分の基本的構造の数値モデルとの比較などが挙げられる。